

<<東北魂>>を鼓舞する
電子新聞

発行所 株式会社遊無有

〒207-0015
東京都東大和市中央1-539-15
http://www.yumuyu.com/
e-mail:y.s.yumuyu@ozzio.jp

東北再興

Re-Create, TOHOKU!

2024年(令和6年)9月16日 月曜日

無料

第148号

毎月発行

発行 2024年(令和6年)9月16日 月曜日

【当新聞発行責任者 兼編集長兼記者紹介】

【砂越 豊】

宮城県生まれ、71歳の新人歴史映像作家兼プロデューサー。3作目の「古代製鉄の埋もれた歴史を発掘した映像」の【奪われた古代鉄王国】の大崎上映会は延期。とはいえ新型コロナウイルス禍を乗り越えて4作目制作に向けて奮闘中。趣味は古代史・縄文文化研究。埋もれた歴史を発掘することと東北から日本を変えることを標榜。



【記録づくめの大谷選手はどこへ行く?】 今年はまだ『リハビリ中』なのに記録づくめ… では来年は何を目指すのか? どうなるのか?



48盗塁を決めた瞬間 デイリースポーツより

記録づくめの大谷選手
今シーズンの大谷選手の記録ラッシュには、マスメディアも、野球関係者もみな驚き、信じがたいという言葉が連発している。国内メディアなどは、何でも「記録」に仕立て上げる傾向はなきにしもあらず

ではあるが、それにしてもここまで多くの記録を達成し、あるいは今シーズン終了までに達成の可能性が以下に列挙してみる。

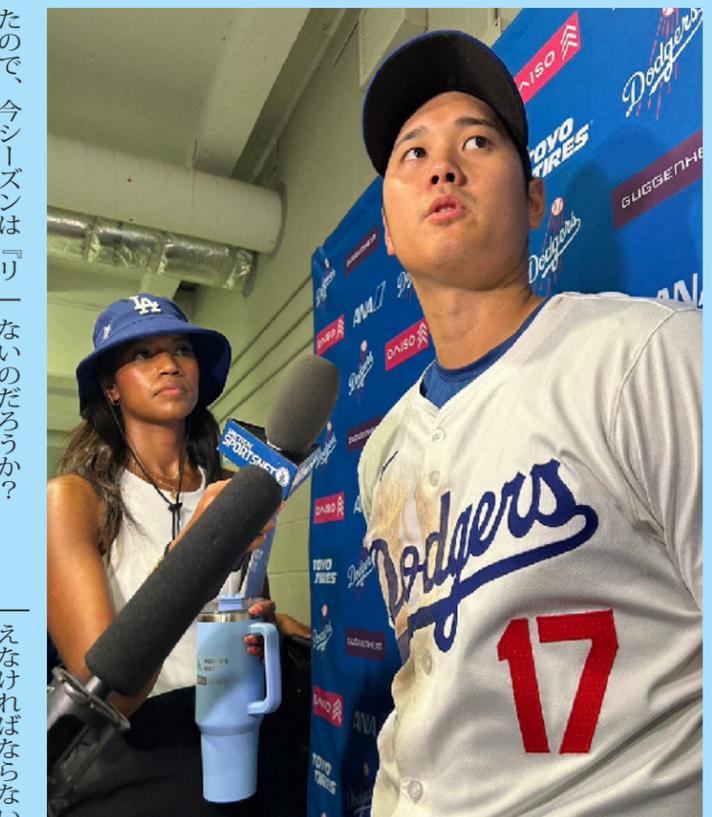
- ③ アジア勢最多記録の二百十八本ホームランのタイ記録達成
- ④ 前人未踏の「47本塁打-48盗塁」に到達
- ⑤ 百十二年ぶり史上五人目の「本塁打王&40盗塁以上」の可能性
- ⑥ 前人未踏の「50本塁打-50盗塁」は今シーズンで達成見込み
- ⑦ DH(指名打者)でのMVPの可能性
- ⑧ シーズンの二冠王、三冠王の可能性
- ⑨ シーズンのMLB制覇のチームメンバーの可能性

本人は記録には無関心

しかし、大谷選手は、こうした記録づくめにはまったく無関心のような。つい先日、打撃の各部門でキャリアハイの成績を残していることについて問われたが「チームが変わっているのだから今年自分数字がどうのこうのみたいなのは気にする余裕が

ない感じはする。今も首位にはいますけど、各ゲームで勝っていつて早く地区優勝を決めたいというところではない。また切り替えて明日も頑張りたいと思います」と個人記録には無関心を強調した。(スポーツニッポン記事より)

たしかに、あまりの記録の多さにいちいち関心を示していたら、とても満足なプレーもできないにちがいない。



記録づくめだが、記録には無関心
Yahoo ニュースより



47号ホームラン NHKニュースより

こうした大谷選手だが、昨春秋、シーズンが終了してから、右ひじの手術をして痛々しい姿が見られていた。

たので、今シーズンは『リハビリ中』であることを忘れそうになる。投げる方は断念したが、打つ方でもまったく影響が

『東北再興』のリーダーを託したい

筆者も、もちろん当新聞も、大谷選手には、野球を越えた活動も期待したいが、そのなかでも、ゆくゆくは『東北再興』のリーダーを託したいと思う。あと十年は野球生活を続けるのだから、それを引退したら、ぜひ『東北再興』のために、さまざまな活動をして欲しいと願っている。

「東北再興」のリーダーを託したいと思う。あと十年は野球生活を続けるのだから、それを引退したら、ぜひ『東北再興』のために、さまざまな活動をして欲しいと願っている。

「東北再興」のリーダーを託したいと思う。あと十年は野球生活を続けるのだから、それを引退したら、ぜひ『東北再興』のために、さまざまな活動をして欲しいと願っている。

東北大学を中心に「世界の先端半導体開発エリア」に！ 世界の半導体開発エリアにするためのいくつかの課題がある 開発に加え海外からの投資誘致と起業経営者育成は不可欠

先端半導体開発は先進国の最優先課題

先端半導体開発の成功と失敗はいまやひとつの国家の財政と戦略を大きく左右する産業となつてきている。その成功は文字通り、世界を支配する領域にまで達している。

その好例として、アメリカのNVIDIA(エヌビディア)などは、生成AIブームによりGPU(グラフィックス処理ユニット)の需要が急増し、新興企業であるにもかかわらず、一時は世界トップレベルの時価総額となったほどである。

また、アメリカと中国の先端半導体開発をめぐる敵対的な関係が発生して以来、先進国各国は、自国での先端半導体開発と製造を最優先にしようと莫大な助成金

で、先端半導体開発企業を自国に誘致しようとしのぎを削っている。

我が日本も、当然ながら、同じ方向を目指し、特に台湾の先端半導体開発製造企業を誘致して、すでに二社が日本進出を決めている。

こうした傾向は今後ますます先鋭化していくことは確実であり、この誘致競争が国家の未来を担うのは確実と言つても過言ではない状況となっている。

半導体工場「SBI×PSMC(台湾)宮城進出決定の当新聞記事再掲

当新聞の第四百十号(今年の新年号)にも紹介したように、日本のSBIホールディングスと台湾の力晶積成電子製造(PSMC)が、半導体工場の建設地に宮城

県大衡村の「第二仙台北部中核工業団地」を選定した。

第一期工事には約四千二百億円を投じ、二〇二七年の量産を目指し、今年後半に着工予定で、さらに追加工事もあり工場の規模も相当なものになる模様である。

これを契機にして、半導体の生産だけでなく、半導体研究には歴史の深い東北大学を中心とした一大研究開発基地も作つて、生産と開発の東北拠点を設置して、ぜひ東北経済に貢献して欲しいものだ。

東北大学が決め手

以上の内容の記事だった。つい先日、当新聞記事と同じように、仙台放送が充実した東北大学の半導体研究を取り上げていたので、その一部を引用し紹介する。

(口語体変換等の編集あり)

宮城県大衡村に工場建設を決めた台湾半導体大手PSMCが決め手のひとつに挙げたのが東北大学の存在という。

東北大学の半導体研究は世界有数のレベルと言われ、その強みは東北大学の「マイクロシステム融合研究開発センター」にあるという。

先月には、半導体に関する学生向けの研修が行われ、名古屋大学やアメリカのスタンフォード大学の学生など四人が参加し、半導体を作る際のもとなる円形の基盤・ウエハーに三百マイクロメートル(髪の毛三本分ほどの深さ)の回路を掘るなど半導体センサーを作る工程を学んだ。

(SBIと台湾PSMC

の合併企業の)JSMCの呉元雄社長「やはり東北大学が近くにあって、東北は半導体企業にとつては人材が集まる良いところじゃないかと考えています」。

東北大学は半導体の研究が始まったばかりの頃から先進的な研究を次々に進め、世界の半導体研究をリードしてきた。その東北大学の研究を引っ張った一人が西澤潤一氏。半導体レーザーやLEDなど数々の半導体装置を発明・実用化させ「ミスター半導体」と呼ばれた。

西澤氏は、いまやインターネットなど情報通信に欠かせない光ファイバーの技術も開発した。西澤氏には、「光通信の父」という異名もある。

西澤潤一さん(2007年取材)「この研究に関して東北大学というのはすごい実績と雰囲気を持っていてますよ。だから、いい研究ができる大学なんですわ」。

現在、東北大学のキャンパス内には半導体に関する製造や研究、評価・分析などを行う施設が八つもある。他の大学では半導体の中の「設計のみ」「製造のみ」など、ひとつの分野を強みとして扱っている場合がほとんどだが、東北大学は各分野を全て網羅している。また、半導体を作るのに必要なクリーンルームの面積も日本の大学で最も広い約九千平方メートル。さらに、研究者や指導する教員は百五十人を超え、こちらも日本の大学でナンバーワン。半導体工場進出に伴い、人材育成など東北大学にかかる期待は大きく、学内の学生に対する研修なども進んでいる。東北大学マイクロシス

テム融合研究開発センター長(東北大学は)企業との産学連携も非常に盛んでありまして、基礎研究だけでなく応用研究、製品に近いところの研究を企業と一緒に進めて社会に貢献していくのも強みだと思っています」。

事業化には経営が伴うが、研究者に「経営業務」まで負わせるのは無理がある。そこで「経営プロ」を誘致することが課題となる。

また、「事業化資金」も莫大なものになるだろうが、これを国内に限定してはいけません」。

国内投資家は、投資資金を短期で回収したがる。そこで、早めの回収のために「株式上場等のEXIT」を急がせる傾向があるので、これを回避しなければならぬ。そのためには、海外投資も呼び込んで、競合させる必要があるのだ。

半導体産業の裾野は広大である。東北大学を中心とした「東北半導体エリア」の成功には上記の課題解決は絶対に欠かせないのである。

東北大学半導体開発の事業化の課題群

このように、東北大学に寄せられる期待は非常に大きいし、国内に限らず、世界にもぜひ貢献して欲しいと願っている。

しかし課題もある。それは「事業化」の課題である。今後は東北大学も単なる研究開発にとどまらず、「事業化」も推進していくだろうが、そこに「経営プロ」と「投資資金」の二つの課題がある。

事業化には経営が伴うが、研究者に「経営業務」まで負わせるのは無理がある。そこで「経営プロ」を誘致することが課題となる。

また、「事業化資金」も莫大なものになるだろうが、これを国内に限定してはいけません」。

国内投資家は、投資資金を短期で回収したがる。そこで、早めの回収のために「株式上場等のEXIT」を急がせる傾向があるので、これを回避しなければならぬ。そのためには、海外投資も呼び込んで、競合させる必要があるのだ。

半導体産業の裾野は広大である。東北大学を中心とした「東北半導体エリア」の成功には上記の課題解決は絶対に欠かせないのである。



東北大学の「マイクロシステム融合研究開発センター」
FNN プライムオンラインより



世界が注目する東北大学の半導体研究
仙台放送より



宮城県に半導体工場
「SBIホールディングス×PSMC(台湾)」
ミヤギテレビより



西澤潤一さんに聞く
ミスター半導体と言われた西澤潤一氏
「宮城の新聞」より

19年ぶりに世界囲碁大会の頂点に立つ東北出身棋士 仙台出身の一力遼三冠=【囲碁界の二刀流】が優勝!



道場の子どもたちに迎えられ
囲碁世界一 一力遼三冠が帰国

提供:日本棋院

0テレNEWSNN
応氏杯世界選手権
中国・上海 きのう

日本一力遼三冠(27)が優勝

優勝杯を手にする一力遼九段 日テレニュースより
(日本棋院提供)

世界囲碁界で久しぶりに日本復権、そこに東北出身棋士が大貢献!
岩手県出身の大谷翔平選手のアメリカ大リーグでの活躍は当新聞でもたびたび取り上げてきた。
その野球のメジャーリーグに比べると、「囲碁」は大分地味ではあるし、知って

いる人が少ないかもしれないが、東北出身の棋士が、このたび、著名な世界大会で優勝して世界一の座についたので、今回号で大きく取り上げることにした。
世界一の座を射止めたのは、宮城県・仙台市出身の「一力遼(いちりきりょう)」棋士(二十七歳)である。

仙台出身「一力遼三冠」が世界のトップ棋士参加の囲碁選手権で優勝
今月八日、囲碁界のメジャーな世界大会のひとつである「応氏杯世界選手権」で、「一力遼」三冠(棋聖・天元・本因坊の三冠)が、中国の謝科九段に勝ち、初優勝を果たした。

決勝は五番勝負だったが、その第一、二局に続き第三局まで三連勝で、一力三冠は国際戦の初優勝を遂げた。この「応氏杯世界選手権」は四年に一回開かれ、日中韓や台湾、米欧の棋士らが出場する国際予選を勝ち抜いた精鋭十六人が世界一を競う大会であり、今年、中国・上海で開かれた。
囲碁界における世界の實力者が集う大会であり、この優勝は非常に意義のあるものである。

実に十九年ぶりの国際大会での優勝

かつては、「囲碁」といえば、国際的に日本は断トツに強かった。
近隣国から、囲碁を習いに多くの棋士の卵が集まった。それで日本の囲碁の實力も向上した。
しかし、囲碁の世界最強国だった日本は、二〇〇〇年代に入ると、国を挙げて實力強化に取り組んだ中国や韓国に追い抜かれてしまったのだ。

そして、二〇一六年、二〇一七年の二度にわたって国内タイトルを総なめして七冠独占を果たした国内最強実力者である井山王座でさえ、二〇一三年に早碁棋戦で優勝したものの、持ち時間の長い主要国際戦では優勝することができなかったのだ。

日本の囲碁界に所属する棋士が持ち時間の長い主要国際戦を制するのは、二〇〇五年にLG杯世界棋王戦で優勝した張栩九段が最後である。
主要な国際大会で日本勢が優勝するのは、そのとき以来のことであり、実に十九年ぶりの快挙であり、日本の囲碁界での喜びは大変なものであった。
ましてや、決勝戦においては、前回大会で敗れた中国の棋士相手に三連勝で初優勝を果たしたので、その喜びはさらに大きなものになったのである。

「一力遼三冠」は囲碁界の「二刀流」

ところで、一力遼棋士というのは、日本の囲碁棋士であるとともに、一方で実業家でもあることはあまり知られていない。
彼は、宮城県内で最大の発行部数を誇る新聞社である「河北新報社」の取締役も兼ねているという異色の二刀流棋士でもあるのだ。

どうしてそうした経歴を持つのかといえば、「河北新報社」を創業した一力家の嫡子という経歴を持っているためである。
それで、父親の一力雅彦氏は同社の社長で、祖父の一力一夫氏は社主という家柄で、彼は取締役として経営にも携わることになった。

一方、囲碁は、祖父・一力一夫氏の手ほどきによって五歳で囲碁を覚え、地元の国際囲碁大学囲碁教室に通い、その後メキメキと實力を上げていった。

今回の決勝戦の経過

今回の応氏杯では予選を突破した世界のトップ棋士十六人がトーナメントで争っていったが、一力三冠の山場は準決勝戦だった。その準決勝戦の相手は中国の強豪、柯潔九段であり、準決勝三番勝負を制して決勝に進出したのだが、なかなかの熱戦を展開した。

この大会は持ち時間(決勝は各三時間半)を使い切っても、三回までであれば二目を相手に与えて延長(同三十五分)できる特徴がある。
一力三冠はこのルールを第一局で一回、第二局で二回利用した。

第三局では一時敗勢に立たされながらも、延長時間を使って粘りを見せ、終盤に逆転を果たした。
二連勝で迎えた第三局は終盤、苦しい形勢から相手のミスを決め、一気に勝負を決めた。そして決勝に進んだ。

そうして、彼は、二十歳未満の国際戦優勝を経験したりして、早くから将来を囁望されていた。
国内では二〇二三年十二月に、棋聖・天元・本因坊の三冠となり、井山裕太王座と並ぶ実力者となったが、主要国際戦では決勝に進出したこともなかった。



自分だけでなく日本勢が上位にこられるよう日本全体で盛り上げていけたら

インタビューに答える一力三冠
NHKより

十九年ぶりに国際大会で優勝したことが日本囲碁界にもたらす意味

対局後、ビデオ通話で開かれた記者会見に登壇した一力三冠は「日本は約二十年間国際棋戦の優勝から遠ざかっていたので、なんとか自分がこの場所に立ちたいと思っていた。いまままでやってきたことがやっと形になった。これをきっかけに他の国際戦でも結果を積み重ねられるようにしたい」と喜びをかみしめた。

また、彼は、「決勝は自信を持って臨めた。世界一というのは自分だけでなく、日本全体の悲願だと感じていた。今までやってきたことが形になった」と感無量の様子で語った。

さらに、「日本棋院創立百周年の記念すべき節目の年に、ファン達の悲願であった国際棋戦優勝を成し遂げられたことは大変感慨深く、これまで囲碁界を支えてくださった多くの皆様により報告ができましたことを大変うれしく思います」とコメントしている。

このように、「スーパースター誕生」に日本囲碁界は歓喜した。日本棋院の武宮陽光理事長は「決勝五番勝負で二連勝したあとのプレッシャーは、これまでにない程大きいものであったと思えます。重圧の中、また名人戦挑戦手合を戦う過密日程の中で偉業を達成されたことに、心から称賛の意を表します。」と語った。

新たな東北スター誕生

大谷選手に続く、新たな東北スター誕生を祝福するとともに、さらに多くの分野で東北スターが誕生することを祈りたい。

「NIPPON防災資産」

「NIPPON防災資産」とは

地域で発生した災害の状況を分かりやすく伝える施設や災害の教訓を伝承する活動などを内閣府と国土交通省が認定する「NIPPON防災資産」の第一回の認定案件が、九月五日に公表された。

国土交通省内にある「NIPPON防災資産」のページによると、この認定制度は元々、昨今の気候変動の影響による水災害の激甚化や頻発化を受けてのものだったようである。

水災害から命を守り、被害を最小化するために、河川整備などのハード面や防災情報の提供などのソフト面の対策に加えて、住民一人ひとりが水災害リスクを「自分事」として考え、主体的な避難行動や防災行動を取ることが重要との観点から、「地域で発生した災害の状況をわかりやすく伝える施設」や「災害の教訓を伝

承する語り部といった活動」などを、「NIPPON防災資産」として認定する制度が今年五月に創設されることになっていった。

しかし、今年元日に能登半島地震が発生したことなどでも踏まえて、内閣府とも連携して、水災害に限らず、地震を始めとしてあらゆる自然災害を対象とすることになったそうである。

認定に当たっては、全国の流域治水協議会等を通じて抽出された防災資産の候補案件を対象に、有識者による選定委員会での審議を経て、内閣府特命担当大臣(防災)と国土交通大臣が「優良認定」と「認定案件を認定する」とある。そして、優良認定・認定ともに一定の有効期間を設けて、活動等が引き続き良質なものであるかの確認等を行った上で、有効期間を更新することとしている、としている。

「優良認定」と「認定」の違いについては、「優良認定」は災害リスクを「自分事化

する観点において、主体的な避難行動や防災行動につながる工夫、仕掛け等が特に優れているもの、とのことである。

なお、今回の認定制度の名称が、よくある「遺産」ではなく「資産」としているのは、「それぞれの活動が過去のものではなく、現在、そして未来において、価値を發揮し続けるものであってほしい」という願いから、とのことで、取り組みの継続や発展によって、この「資産」の価値をさらに高めてほしいという期待、さらに各地域において、過去の災害の教訓や今後の備えに対する理解が深まって、地域の防災力の向上に繋がっていく期待も込められていると説明されている。

第一回認定案件の身

今回の第一回認定案件では、「優良認定」、「認定」ともそれぞれ一件が認定されている。「優良認定」としては、「洞爺湖有珠火山マスタワー」、「三二一伝承ロード」、「婦恋村・天明三年浅間山噴火災害語り継ぎ活動」、「えちごせきかわ 大したもん蛇まつり」、「阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター」、「和歌山県土砂災害啓発センター」、「稲むらの火の館」、「広島市豪雨災害伝承館」、「四国防災八十八話マップ」、「黒潮町の防災ツーリズム」、「熊本地震 記憶の廻廊」が認定さ

一方の「認定」では、「奥尻島津波館及び奥尻島津波語り部隊」、「厚真町震災学習プログラム」、「栗駒山麓ジオパーク」、「信濃川大内川流域治水ポータルサイト」、「福知山市治水記念館」、「坂町自然災害伝承公園」、「乙亥会館災害伝承展示室」、「雲仙岳災害記念館」、「念仏講まんじゅう配り」、「大分県災害データアーカイブ及びフィールドツアー」が認定されている。確かに、全国各地の様々な災害に関する施設や取り組みが選ばれていることが分かる。

このうち東北では、「優良認定」で本連載でも第一三二号と第一三五号で取り上げたことのある「三二一伝承ロード」が認定され、「認定」で「栗駒山麓ジオパーク」が認定された。「三二一伝承ロード」が「優良認定」に認定されたポイントとしては、①「教訓が、いのちを救う」という明確なコンセプトのもと、東日本大震災関連の震災伝承施設のネットワーク化による防災に関する様々な取組や活動が行われている、②官民一体の「東北復興ツーリズム推進ネットワーク」設立、外国人も含めた旅行教育の訪問先となっている「東北復興ツーリズム」を推進している、の二点が挙げられている。一方「認定」となった「栗駒山麓ジオパーク」は、平成二〇年の岩手・宮城内

「三二一伝承ロード」

「三二一伝承ロード」は青森県、岩手県、宮城県、福島県の東北四県にある、現在三四四件の「震災伝承施設」を登録し、それらの有機的な連携を図っており、「優良認定」に相応しい取り組みである。「震災伝承施設」は第一分類、第二分類、第三分類の三つに分類され、①災害の教訓が理解できるもの、②災害時の防災に貢献できるもの、③災害の恐怖や自然の畏怖を理解できるもの、④災害における歴史的・学術的価値があるもの、⑤その他、災害の実情や教訓の伝承と認められるもの、のいずれか一つ以上に該当すれば第一分類として登録される。第二分類はそれら第一分類の「震災伝承施設」のうち、「公共交通機関等の利便性が高い近隣に有料又は無料の駐車場がある等、来訪者が訪問しやすい施設」が登録される。さらに第三分類は第二分類のうち、「案内員の配置や語

り部活動等、来訪者の理解しやすさに配慮している施設が登録される。

現在、分類の内訳は、第一分類が一五八件、第二分類が一八八件、第三分類が六八件あるが、今回のこの「NIPPON防災資産」の趣旨から言えば、これら「三二一伝承ロード」で登録されている「震災伝承施設」のうち、特に第三分類の施設は単独でも充分「NIPPON防災資産」に登録されてもおかしくない施設ばかりである。まあ、それらを全部登録すると、地域や災害の種類の上でのバランスが取れなくなることから今回は「三二一伝承ロード」としてそれらを横につなぐ取り組みがまず登録されたのかもしれない。今後、回が進むにつれて、それぞれの個別の取り組みにも焦点が当たれることを期待したい。

「栗駒山麓ジオパーク」

「ジオパーク」というのは、ユネスコでは「国際的に価値のある地質遺産を保護し、そうした地質遺産がもたらした自然環境や地域の文化への理解を深め、科学研究や教育、地域振興等に活用することにより、自然と人間との共生及び持続可能な開発を実現することを目指す」とした事業」と定義されている。二〇一五年に開催された第三八回ユネスコ総会において、それまでユネスコにこの地震を体験していな

子どもたちへの学習プログラムが充実しており、防災教育にもっともっと知られてほしい存在である。今回「NIPPON防災資産」に、既存のジオパークとして唯一登録されたのも、こうした取り組みの存在が大きかったことは、先に紹介した登録のポイントからも窺える。ジオパークの一つの方向性として、他地域の参考になる事例である。

東北には、今回「NIPPON防災資産」に認定された栗駒山麓の他、前号で紹介した下北、三陸、八峰白神、男鹿半島・大潟、鳥海山・飛鳥、ゆざわ、磐梯山の八つのジオパークがあり、蔵王が現在ジオパーク登録を目指している。これらのうち、三陸はまさに「繰り返される災害に立ち向かい、将来に備える」ことを標榜しており、「NIPPON防災資産」の親和性も高そうである。

「栗駒山麓ジオパーク」では、山の形が完全に変わってしまった国内最大級と言われる地すべり地形「荒砥沢地すべり」を始め、「火山山麓地すべり地帯」や「花山地区地すべり地帯」など、岩手・宮城内陸地震による地形の変化を今もまざまざと目の当たりにすることができ、それだけでなく、特にこの地震を体験していな

子どもたちへの学習プログラムが充実しており、防災教育にもっともっと知られてほしい存在である。今回「NIPPON防災資産」に、既存のジオパークとして唯一登録されたのも、こうした取り組みの存在が大きかったことは、先に紹介した登録のポイントからも窺える。ジオパークの一つの方向性として、他地域の参考になる事例である。

もちろん、この「NIPPON防災資産」に登録されようがされまいが、そうしたことに関係なく、この東北の地でも各地域で災害に対する備えを促し、災害に関する記憶を風化させないための取り組みが数多くなされている。それらの取り組みは行政主導のもの、行政と住民とが協働しているものもあるが、住民の自発的意思に基づくものも多い。気仙沼市のほぼ中央、景勝地の岩井崎に近い波路上(はじかみ)にある杉ノ下地区は、明治三陸地震の際には海抜一メートルの高台にあるこの地にも津波が押し寄せ、集落の全八五戸を押し流した上に、住民九三名の生命を奪った。

遺族は杉ノ下遺族会を立ち上げ、犠牲者を供養し、被害を後世に伝えるための慰霊碑を建立した。この慰霊碑は、「三二一伝承ロード」の第二分類の「震災伝承施設」にも指定されている。先ほど紹介した定義によれば、第二分類は登録されたもののうち「来訪者が訪問しやすい施設」が登録されるが、この慰霊碑に関してはそれだけでなく、遺族会の会員のうち、一部の方が毎月の月命日、すなわち毎月一日に必ずこの慰霊碑に集まり、訪れる人を対象に語り部として活動している。「案内員の配置や語り部活動等、来訪者の理解しやすさに配慮している施設」である第三分類に登録されてもよいくらいの取り組みである。月に一回のみということで第二分類にとどまっているのかもしれないが、震災から一三年半が過ぎても毎月欠かさずこうした活動を自発的に続けておられる姿勢には頭が下がる。「NIPPON防災資産」にはぜひ、大掛かりな取り組みばかりでなく、こうした取り組みにも注目してほしいものである。と同時に思うのは、一人ひとりが自分のできる範囲でこうして防災に関する取り組みを行うっていくことが、防災を「自分事」として捉えて次の災害に対する備えを行うために何よりも重要なことなのではないだろうかということである。私自身も改めてそうした身の丈に合った取り組みは続けていこうと思いを新たにしたい。

執筆者紹介

大友浩平

(おおもともこうへい)

奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。
「東北ブログ」
<http://blog.livedoor.jp/anagma5/>



Facebook
<https://www.facebook.com/kouchi.ootomo/>

「栗駒山麓ジオパーク」は、平成二〇年の岩手・宮城内

「栗駒山麓ジオパーク」は、平成二〇年の岩手・宮城内

「栗駒山麓ジオパーク」は、平成二〇年の岩手・宮城内

「栗駒山麓ジオパーク」は、平成二〇年の岩手・宮城内

「栗駒山麓ジオパーク」は、平成二〇年の岩手・宮城内

「栗駒山麓ジオパーク」は、平成二〇年の岩手・宮城内

「栗駒山麓ジオパーク」は、平成二〇年の岩手・宮城内

古代からの魅惑の輝きに 新たに塗り重ねられる東北の事

近年、東京圏一極集中が加速しているとの報道の一方で、いや集中は地方中核の都市所謂「札仙広福」にも波及しているのであり、それは相変わらずそれら周囲の、過疎化の一途を辿る小都市・町村の多くが、いずれ消滅するであろう地方の救済であるとの論調が既に定着しつつあるようにも思える。個人的に、札仙広福の一角・仙台に長年住む身としては、昨今都心の再開発含む目まぐるしい都会的發展の裏に一種焦燥のような感触を得る事がある。

列島北端の札幌、西端の福岡が持つ地理的利点などから感じられる半ば絶対的な安定感に比べると、より東京や大阪に近く都市規模



奥羽越現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、全国の旅の末、仙台に移住。どの本屋に入っても、とりあえず郷土本の棚に向かつて立ち読みを始め東北好きである。

かつた為、東京一極集中は続いているように見える。しかし前述の、若者の決して少なくない割合は新たな世界を求め、その法則が正しいとして、且つその法則こそが戦後日本を、あるいは人類を進展させてきたとすれば、逆に今後の大都市への停滞・滞留はむしろ東京そして日本を衰亡させる状況に他ならないのである。以前、拙稿にて主張したように、「〇〇を指すなら東京だ」とされる出版や芸術・芸能分野、即ち文化的求心力の牙城を手放さない限り、東京は特別な場所であり続けるのだが、そもそも人々が移動していく心理自体も無視はできない。

例えば私の場合で言うと十四歳頃になると生まれ育った場所とは別の、新しく面白い世界(都市とは限らない)へと旅立ちたくなったものだ。全ての少年少女が同様だとは言わぬまでも若者の少なからぬ割合が現状ではない別の世界に憧れを抱く。これは確かな事であり、そのような者が常に存在するからこそ、現代のような人々の大移動が世代を越えて続き、それが今は大都市に向かう大きな流れとなつているのだと思う。

さて、そのようにしてその流れに乗り多くの若者、人々が東京周辺を始め大都市圏に集まり、各々家族を作つて多くは郊外に家を持ち定住するが、戦後団塊世代からその子供たち(筆者の世代と言える)にかけてこの流れはあまり変わらな

かった為、東京一極集中は続いているように見える。しかし前述の、若者の決して少なくない割合は新たな世界を求め、その法則が正しいとして、且つその法則こそが戦後日本を、あるいは人類を進展させてきたとすれば、逆に今後の大都市への停滞・滞留はむしろ東京そして日本を衰亡させる状況に他ならないのである。以前、拙稿にて主張したように、「〇〇を指すなら東京だ」とされる出版や芸術・芸能分野、即ち文化的求心力の牙城を手放さない限り、東京は特別な場所であり続けるのだが、そもそも人々が移動していく心理自体も無視はできない。

例えば私の場合で言うと十四歳頃になると生まれ育った場所とは別の、新しく面白い世界(都市とは限らない)へと旅立ちたくなったものだ。全ての少年少女が同様だとは言わぬまでも若者の少なからぬ割合が現状ではない別の世界に憧れを抱く。これは確かな事であり、そのような者が常に存在するからこそ、現代のような人々の大移動が世代を越えて続き、それが今は大都市に向かう大きな流れとなつているのだと思う。

さて、そのようにしてその流れに乗り多くの若者、人々が東京周辺を始め大都市圏に集まり、各々家族を作つて多くは郊外に家を持ち定住するが、戦後団塊世代からその子供たち(筆者の世代と言える)にかけてこの流れはあまり変わらな



筆者愛用の安比塗汁椀

方針でもあるという。工藤氏によれば、産地や工房が大きくなる事は経営が傾いた際のリスクを上げる事でもあるとして、むしろ同窓生個々が独立した小商いとして全国にネットワークを形成する形の方がこれからの時代に合っている、と言うのだ。

今や、どの地方も観光や移住・定住の促進に躍起となる中、見返りを求めて困らぬ事をせず、産地のブランド化も望まず単立つ個人の未来を尊重するのみという驚くべき指針だが、無償の愛と信頼とともに送り出された職人達の胸にはどの大都市よりも強烈に己を惹きつけ続ける、本物の「ふるさと」の光が輝き続けるだろう。まさしくそれは、昔ながらの強く出られない東北らしさのように見えつつも、実はどこよりも柔軟で新しい、東北ならではの全国制覇の形ではないだろうか。とも思えるのである。



祭りの日のコマ



ハスの花



ツユクサ

数十年前には、夏が終わったと感じたときも、それほど季節の変わり目に感慨を抱くこともなかった。そこから大分時間を積み重ねたいまはまったく感じ方が変わった。
真夏の盛りの喧騒が、静かな秋の中にすべり落ちてのみ込まれていくようななまめかしさを感じるのだ。
若い時に比べたら、身体内のエネルギーは大きく減少した。他方、相も変らぬ季節の移り変わりを動かしていくエネルギーは常に不変であり、それがとてつもなく大きく感じられてくる。
若いころは分からなかった大自然のエネルギーを素直に受け止めることが出来るようになったのだろう。

シリーズ 遠野の自然
「遠野の白露」
遠野 1000 景より



フジウツギ



ゴマダラカミキリ



ツチアケビ



クロアゲハ



キレンゲショウマ

新シリーズ【東北を再発見する旅】…⑫ 震災1年半後の「鶺住居」 東日本大震災の傷跡が生々しく残る釜石沿岸部から北上する旅①



津波で半分壊れた防波堤



津波で半分壊れた防波堤の裏側

二〇一二年九月、岩手県釜石市鶺住居(うのすまい)地区への訪問は、東日本大震災発生後一年半経ってからの岩手被災地への取材の旅のはじまりでもあった。岩手県の釜石市を起点にして、太平洋湾岸沿いに北上し、山田町までわずか一日で一挙に巡りたいと計画した旅の最初の場所だった。

大震災後の現地がどうなっているかを取材するためだったが、震災後に岩手を訪問するのは初めてだった。筆者は当時まだサラリーマン勤めをしており、住まいは東京で、休日を利用しての大震災後の東北の被災地各地を取材するのはそれなりの苦勞もあった。



津波で破壊された柱の跡

ここで東日本大震災発生後一年半も経過してからの岩手訪問となった経緯について少し触れさせて欲しい。震災発生後の半年間、この震災を決して忘れることのないようにと、テレビで流れる震災情報を、特に福島第一原発関連情報を、ほぼ毎日、深夜まで、脳裏に記憶に徹底的に叩き込んだ。そのあと約三か月かけて一冊の本を自費出版した。当時の政府のやり方、すなわち「国主導の復興」では被災地が望む復興はむずかしいと考へて、真の復興を実現するには「東北が独立する」しかないとの思いから本を出版したが、その執筆と出版と販売と普及活動に全体で半年を費やした。

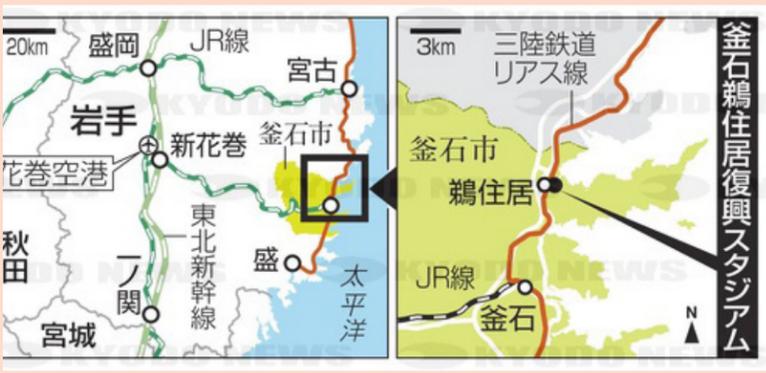
かと思自問自答した結果、被災地復興の経過を引き続きフォローして行く必要があるとの思いと、自著の主張が正しいのかをチェックする必要があるとの観点から、当新聞である『東北再興』、最初は『東北復興』を発売することにした。震災後、一年三ヶ月後のことだった。新聞取材開始は、筆者の縁のある宮城県石巻市だったが、その後、岩手へと展開しようと思ひ、この旅につながったのだ。

すでに、釜石市内には大震災の生々しい傷跡は見られなかった。ただ、津波で破壊されて取り除かれた住居の基礎部分のみがみ出しになった場所があり、鉄骨支柱が津波の力で「千切られた」と思われる場所があった。

津波のパワーを感じさせた。四十五号線に入り、長いトンネルを抜けて、両石湾を右手に見て、さらに北上した。そして鶺住居地区に着いた。そこで、釜石で初めて大震災の生々しい傷跡に遭遇した。釜石市内と異なり、震災後の整備が完全には行き届かないために、津波で破壊された防波堤などがみ出しになっていた。

この地域は死者と行方不明者五百八十三人と甚大な被害を受けた地域であった。市立鶺住居小学校と市立釜石東中学校も津波により校舎が全壊・浸水被害を受けた。

しかし、釜石市は被災後の復興計画を策定する際に、復興を支える主要施策のひとつにスポーツ大会の開催(因みに、筆者はラグビーファンであり、また、当新聞は『日本製鉄釜石シーウェイブス』を応援している)の可能性を模索したのだ。釜石は、かつて日本選手権七連覇を果たして「北の鉄人」とも称された新日鐵釜石(現・釜石シーウェイブス)の地元であり、ラグビーが盛んな街であったことから、学校跡地に球技場としてのスタジアムを建設し、二〇一九年に日本で開催するラグビーワールドカップの試合誘致を目指し、誘致に成功した。開催地に立候補した十五都市の中で唯一の新設会場だった。そこに至る苦勞はいかばかりであったろうか?関係者の尽力には頭が下がるばかりだ。



岩手県釜石市鶺住居地区と「鶺住居復興スタジアム」の地図
・・・ KYODO NEWS より



「鶺住居復興スタジアム」
・・・釜石観光物産協会より



写真で
お伝えする
東北の風景
「八幡平の花々」
写真撮影
尾崎匠

